KANDA NISSHO MEMORIAL MUSEUM of ART

神田日勝記念館だより

神田日勝記念館　〒081-0292　北海道河東郡鹿追町東町3丁目2　TEL (01566) 6-1555

静物 1966年

contents

2 馬の絵作品展札幌巡回展／芸術鑑賞バスツアー
子どもワークショップ／子ども芸術鑑賞のつどい

3 子ども絵画教室
絵画教室／子どもワークショップ

4 「神田日勝の静物画を巡って」
―平成13年度前期常設展―

5 作品調査報告その1（研究ノートI）

6 寄稿文「神田日勝芸術の凄味」伏木田光夫
「日勝を鑑賞教材で」渡邉禎祥

7 「神田日勝に関する二つの疑問」（研究ノートII）
神田日勝に関わる文献紹介

8 感想ノートから
今後の事業予定／新規販売物の紹介

2001.3.31
14

ア・ラ・カルト ショップ

芸術鑑賞

第6回馬の絵作品展札幌巡回展

十月二十日～十一月八日

札幌ファクトリー三条館一Fウォールギャラリーで、入選・入賞作九十六点を展示しました。応募総数一、三七三点の中から選ばれた力作ぞろいで、札幌近郊の出品者や買い物客などが足を留めて見入っていたようです。

芸術鑑賞バスツアー

十一月五日

好天に恵まれた中、二十一名の参加者は、まず北海道立近代美術館（札幌市）の「目撃者―写真が語る二十世紀」展会場で、二十世紀の歴史の断面を切り取った写真の数々を興味深げに見入っていました。その後、サッポロファクトリーで「馬の絵作品展巡回展」を鑑賞しました。

子ども芸術鑑賞のつどい

一月十一日

今回は北海道立帯広美術館で開催された『東欧絵本の世界展』を鑑賞しました。幻想的なものや楽しいものなど、ストーリーも絵本原画の横にパネルで掲示されており、思わず物語の世界に引き込まれてしまいました。

いろいろな技法で クリスマス・カードを作ろう

12月17日

冬季は、消しゴムを切ったりダンボールを丸めてフィルム・ケースに入れたりして、スタンプを作りポンポン押したり、また、金網の上から歯ブラシで絵の具を霧状に散らして模様を作り、これらの技法を組み合わせて楽しいクリスマス・カードを作りました。はがきの大きさの赤や青、黒の色画用紙を使って工夫して作ったので、面白いカードができました。参加した32人の小学生はとても一生懸命で、時間の経つのも忘れているようでした。

秋から冬の催事

絵画教室 子どもワーク

身体全身で絵を描こう！

01'3月28日・29日

春季は、講師に内田芳恵先生を迎え、身体全身を使ってのびのび自由に絵を描くワークショップを企画しました。指に直接絵の具を付けて紙に描くフィンガーペイントや、いらなくなった雑誌や新聞、ポスターの切り抜きなど貼り絵風にして作品を作るコラージュなどを行いました。絵の具が飛び散ったり、顔や手に絵の具が付いたりしましたが、皆とても楽しそうに取り組んでいました。（完成作品は４月３日から７日まで鹿追町民ホール１階ロビーに展示）

子ども絵画教室―油絵講座

一月九・十・十一日

三日間に渡って小学一年生から中学二年生まで十名が参加して、とても熱心に取り組んでくれました。出村英和先生の指導のもと、花瓶や壺、果物の模型などを描きました。二度目の人もいましたが、ほとんどが初めて描く油絵。出来映えは満足のいくものとなったようです。

絵画教室―油絵講座

二月十三・十五・二十・二十二日

出村英和先生の指導で、高校生一名を含む六名が参加。経験者は人物を、初心者は果物を八号のキャンバスに描きました。四日間に渡って一枚の油絵を描くのに苦心しているようでした。けれど、人物ではモデルの写真を撮ったり、デッサンを繰り返したりしながらモデルの特徴をとらえる工夫をしたり、また果物では画集で静物画の描き方を研究したりして、とても熱心に取り組んでいました。

「神田日勝の静物画」を巡って

―平成十三年度 前期常設展―

「家」 一九六〇年

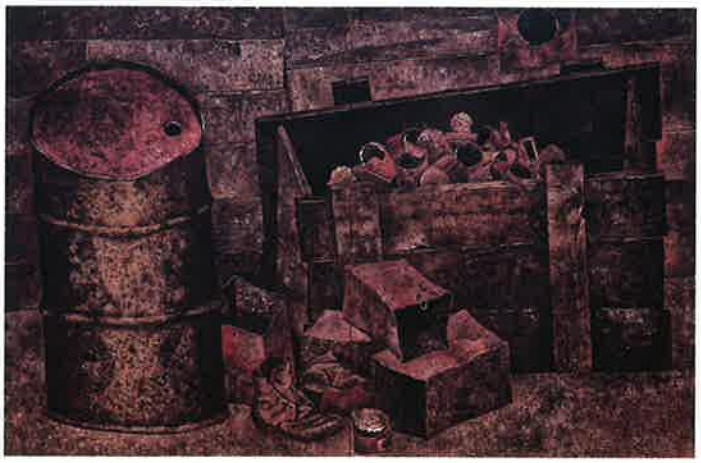
神田日勝の「静物」（注表紙作品）は、一九六六年に描かれたベニヤ板二枚を張り合わせた一五〇号大のものですが、日勝は静物画をいつ頃から、どのように描き始めたのでしょうか。

「家」（一九六〇年）は、前景にブリキの鍋、バケツ、空き缶などが描かれています。画面全体を占める家の板塀は暗い黄褐色で、前景の赤褐色のブリキ類の存在をわずかに引き立たせています。「ゴミ箱」（一九六一年）になると、全体の色調が赤褐色になり、ブリキの土管や空き缶などが画の主役として存在を強く主張し始めます。構図的に見て特徴となるのは、形の捉え方です。神田日勝は、伊原宇三郎の『キュビスム』を読んでいましたが、このキュビスム的視点がこの二点の作品に採用されています。

日勝は多視点、つまり一つの物体を多方向から見た視点で描き、それを再構成するやり方をとっています。わかりやすい例を挙げると、土管の上から見た部分と、胴の部分の視点は一致していません。しかし、写実とは矛盾するこの捉え方は、実は物の本質を捉える上で重要な役割を果たしているのです。

「静物」にもどると、画面いっぱいに広げられた莚の上に、りんごやみかん、魚や鶏、じゃがいもやたまねぎ、そして画面の上のほうに段ボール箱と絵の具の缶やビール瓶が置かれています。一見、無造作に、そして写実的に描かれたように見えるそれらの物たちは二つの点で私たちの目を巧妙にだましています。ひとつは、光による物の影があまりないこと、そしてもうひとつは逆遠近法で描かれていることです。それぞれの存在を主張し、見るものにぐっと迫ってくるのは、これら二つの技法的効果によるところが大きいのではないでしょうか。

今回の常設展は主に二階の展示室を使って、日勝の静物画に焦点をあて、その魅力と特徴を紹介しようとするものです。当館所蔵作品に加え、個人所蔵の四点の静物画を展示します。



「ゴミ箱」 一九六一年

作品調査報告その一（研究ノートI）

昨年十一月七日に、鹿追町内で神田日勝の作品を所蔵している個人のお宅を訪問して聞き取り調査を行いました。

まず、北海道鹿追高校の校長室に飾られている『収穫』（一九六六年）（写真上）について、現校長の古湊敬子氏にお話を伺いました。この作品は、神田ミサ子さんの叔父の高野保昌氏が鹿追町の教育委員長を務めていた時に、同校に寄贈したものです。秋の収穫を終えた風景を、一点透視図法でとらえ、馬草、サイロのある農家が黒っぽいシルエットのように描いています。

「収穫」　1966年

次に笹川在住の白岩初子氏にお話を伺いました。三点の日勝作品を所蔵しており、一九六六年に家を新築した際に夫の清司氏（故人）が『湿原の農道』を、その後、『静物』（一九六八年）（写真下）と『風景』（一九六九年頃）の二点を購入したそうです。日勝とは同じ笹川でも別の地域だったのですが、清司氏が水彩画を描いていたので知っていたそうです。『湿原の農道』は構図的に『収穫』と似ていますが、馬草などのモチーフが微妙に違います。『風景』は雪の農場を描いた小品で、『静物』はりんごとみかんを描いた小品ながら完成度の高い作品です。風景二点は、四月二十二日まで、また静物は二十四日から常設展で展示します。

加藤勝征氏宅には『緑影』（一九六九年）が所蔵されており、お話は咲子夫人から伺いました。この作品は、結婚祝いに父親の高野保昌氏から贈られたものだそうです。高野氏が日勝に鹿追の夏の農村風景を描くよう依頼し、できあがった作品に更に山を描き入れるよう注文をつけたのだそうです。季節的には新緑の頃で、牛が描かれているのも日勝には珍しい作品です。この作品も四月二十二日まで常設展で展示します。

森住一夫氏宅には十五号大の『風景』（一九六九年）があり、母親が神田ミサ子さんに頼んで描いてもらった絵だそうです。この作品は森住氏にとっては思い出深いもので、少年時代の鹿追の風景を思い起こさせるものだそうです。購入以来、居間にずっと飾っており、愛着のある作品だとも伺いました。この作品は四月二十二日まで常設展で展示します。

最後に、加藤慶昭氏にお話を伺いました。父親の友衛氏が、小山田富雄氏から購入した作品だそうです。題名はついていませんが、モチーフから静物画だとわかります。慶昭氏は日勝と笹川敬農青年団で、一緒に相撲をとったことがあるそうです。日勝は手取りで強く祭りの際にはよく誘われて相撲をとったそうです。作品の制作は一九六七年頃と思われ、日勝の静物画でよく取り上げられるりんごとみかんが描かれており、この作品は四月二十四日から常設展で展示する予定です。

（釜沢恵子）

「静物」　1968年

寄稿文①

「神田日勝芸術の凄味」

伏木田　光夫氏

どうして日勝のことを書こうとすると、いつまでも心が痛いのだろうかと思う。昨年三度目の日勝美術館をたづねると、やはり胸がキリキリと泣くのだ。

時間がたって、時代がゆるやかに滑っていったのに、日勝に似た男にも、日勝の芸術らしきものにも、ついに出会うことがないのは、彼の芸術が実は隔絶した孤高さを持っていたのだと僕に気づかせるのだった。

あれは一九六五年の全道展の初日だったと思うが、なんとなく当時の全道展の新鋭達が群になって、酒宴となった時のことだった。蛯子善悦（故人）や福岡正治（故人）や箱根俊男（故人）や神田一明が一緒だった。どうしたことか日勝はいなかったように思う。箱根が「神田日勝の作品は、ペンティグナイフばかりで描いていて、ああいう絵は根気だけあれば簡単に描けるんじゃない」と神田一明に、からんだものだった。その時、日勝の兄・一明が「そんなことはない。あのやり方はものすごく大変なことだと思う。集中力が信じられないくらいいる仕事だから」と言った。

今、その状景を鮮やかに想い出している。あの一見単純作業に見える、ペンティグナイフの多用さは、彼の芸術を観ることの冷たさから救い、触覚のリアリティに変容させ、もう一つの深淵の方にまで彼を導いていったものだと、今は気づくのだった。視るという客観的リアリティに対して、人間がそこに居る（アクチャリティ）という存在論は実在哲学では中核をなすものであるが、日勝芸術の切実さは、日勝がそこに居ることだ。きわめて全人間的な彼が内的突きあげを繰り返しながら時間と空間を統合させ、アクチャリティ（居る）として実存していることだった。

それ故、彼の芸術は観る者に対して、ぶっきらぼうな原型として、そこにころがっているように見える。それからようやくサービスの悪いトツトツ弁が始まる。これには参ってしまう。やがて人々は彼を愛し、彼の芸術をたまらなく好きになってしまうのだ。

伏木田 光夫：
1935（昭和10）年浦河町生まれ。52年、原静一に師事。58年、武蔵野美術学校西洋画科卒。61年、全道展協会賞受賞。63年、国画会国画賞受賞。69~71年、滞仏。サロン・ドートンヌ等出品。北海道現代美術展（78~82年）、イメージ・北海道の美術（83~88年　北海道立近代美術館）出品。97年、伏木田光夫展開催（芸術の森美術館）。98年、浦河町に伏木田光夫美術館開館。

「日勝を鑑賞教材で」

渡邉　禎祥氏

三年生の授業も残り少なくなり、最後は十勝の芸術文化についてビデオテープを活用しながら、画友であった「神田日勝」を教材に取り上げた。事前学習として数々の日勝の画集等々を整えて作品鑑賞し、三十二歳で夭逝した親愛なる画友「日勝さんとは最初作品からの出会いと亡くなるまでの充実した四年間互いに制作を通して親交を深めていた時に」……。生涯けして忘れることのできない悲しい出来ごとより授業の導入となる。

生徒個々は「十勝で有名な物故作家となった日勝の固有名詞は漠然とは知っていた」とか、「以前に家族と日勝記念館を観覧しました」等。日常の指導者がまさか日勝との画友であったことは生徒は知らなかった。リアクションは最高潮となり、「先生！マジー？」「嘘だぁー！」「友だちだったって？」と。

次週には視聴覚室にて二十六年前にNHK帯広局制作で放映した「神田日勝の世界」と八年前STV制作のドキュメンタリー「絶筆―神田日勝の世界」を視聴してもらった。両番組とも画友だったことで僕も出演者の一人として映像にも登場しており、本質的に厳しい営農と制作活動に専念した日勝の短い生涯に強烈な感動を抱き、生徒にはこれからの人生に大きな励みと刺激を与える。「神田日勝の世界」は新鮮な鑑賞教材として、有効な授業展開ができたと自負する。蛇足ではあるが映像の中で「たばこの煙をくゆらせた日勝の笑顔の写真」実はぼくの撮った偶然のスナップ。生徒は「ほんとうに画友だったのだぁ」と説得力を与え信頼された次第である。

この授業を終えて益々日勝の作品が新鮮で輝きを覚え、今大作に取り組み悪戦苦闘の今日この頃である。

渡邉 禎祥：
1934（昭和9）年青森市生まれ。55年、北海道学芸大学釧路分校美術科終了。66年、全道展入選。67年、独立美術展入選。70年、全道展奨励賞受賞。独立展会友。71年、全道展会友。94年、「神田日勝と1960年代の美術」展（当館）出品。

「神田日勝に関する二つの疑問」

（研究ノートII）

数年前北海道新聞社から『画集神田日勝』が刊行されることとなり、その年譜を記念館で編集することとなった。大筋は米山将治前館長が作成した旧版の『神田日勝画集』を下敷きに作業が進められた。その過程で派生した疑問点が二点あり、それは今も僕の中で解消されていない。

第一は帯広市の平原社展に関することである。旧版では一九五六年「痩馬」を制作、市民絵画展に出品奨励賞を受賞、翌五七年「馬」を制作、平原社展に初出品平原社賞を受賞、さらに翌年平原社展（協会改称）に出品、協会賞を受賞とある。ところが一九九五年刊行の第七十回記念『平原社展図録』には五六年の「第三一回展」と五八年の「第三三回展」には受賞記録は掲載されていない。帯広市図書館所蔵の新聞を調査した結果、昭和三一年九月二十日付の「十勝毎日新聞」紙上に「平原社美術展の入賞者決る」の見出しで「協会賞―清水恭子」等と並んで「朝日奨励賞―神田日勝」の記事を発見することができた。しかし五八年の協会賞受賞に関しては、いまだパンフレットを含め、その証拠を実見していない。もちろん北広島等に転出した当時の事務局担当の画家の方にも追跡取材を行ったうえでのことである。

図A

図B

図C

第二は「帯広美術協会」に関してのことである。旧版では「一九六三年三月、『板・足・頭』を出品」とある。田川善立氏の所蔵する展覧会パンフレットを参照すると、時期は「一月」であり、出品作は「人A」「人B」と記されている。「人A」は「板・足・頭」のことであるが、それでは「人B」はどの作品であろうか。田川氏は旧版画集の作品群の中で「一人」（一九六四年制作・図A）と思われると回想されておられたが、これは時期的に合致はしない。壁があり、人の顔がある作品はそう多くはない。たまたま遺族所蔵のアルバムをみていたところ、「板・足・頭」とともに図Bの作品が貼付されていた。この作品の実物はぼくは未見である。確認作業はこれからだが、密かに「人B」との関連を考えている。なおこれに類似した素描は現在記念館に寄託されている（図C）。

（菅　訓章）

1957年　平原社賞受賞の賞状

神田日勝に関わる文献紹介

『神田日勝』－北辺のリアリスト　鈴木正實著　1984(昭和59)年北海道新聞社より出版　著者の鈴木正實氏は、現在北海道立近代美術館の学芸部長。1978（昭和53）年に開催された「神田日勝の世界」展に携わり、神田日勝記念館の開館当初から運営委員を勤めています。ミュージアム新書の４冊目として出版され、神田日勝に関する基本的な文献の一つです。

Information

今後の事業予定

平成13年度事業予定

- 蕪墾祭（6/17）
- 馬耕忌（8/26）
- 第7回馬の絵作品展（10/10～16）
- 芸術鑑賞バスツアー（10/21）
- 子ども芸術鑑賞バスツアー
- 絵画教室
- 子ども絵画教室
- 子どもワークショップ
- ファミリー美術館事業
- 「人間の情景－北の生活者たち－」展（仮称）～1960年代を中心に～（12月～2月）
- 展覧会事業（実行委員会主催）
  天折画家の系譜－信濃デッサン館所蔵作品による－（4/28～5/8）
  宮沢克忠展（7/20～7/26）
  人を描く－木下晋・緑川俊一・輪島進－ 三人展－（8/11～17）
  西脇順三郎展（8/26～9/3）

休館日の変更のお知らせ

- 月曜休館〔ただし11月から翌4月。祝日と重なる場合は開館〕
- 年末年始〔12月30日から1月5日〕

<「若者の素顔」のための背景画>

<水辺の馬>

<湿原の群馬>

<牛>

絵はがき新発売

今年度は、新たに５種類の絵はがきを４月から当館売店にて発売致します。

<室内風景>

感想ノートより－⑫

絵とは、いかに己を表現するか、とれたか、わかきになれるか。神田日勝の絵は、力強く、どこかさみしげ、でも、なにか、生きる事へのこだわりを感じた。
8/11　湯沢院町　大津田公

8/15　光州への帰途に回り道で観賞させて頂き感動しました。河世式に生きた者にとって戦後の開拓に生きた日勝氏の姿は本当に胸あつく胸が痛くなる思いです。
本当に楽しませて頂いた事に感謝の一言。
[illegible]　赤石F（家族と共に）

Mittwoch 25. August 2000
長旅の途上――7月の初めに家を出てから――にフラリと寄っていただきました。
風景を描いた物静かな作品の群や、丹念に描き込まれた静物画――特に未完の魚の骨と青いコップ――に強くひかれました。
それにしても、絶筆となった「馬」の瞳は、なんと深い悲しみをたたえているでしょう。作品の前にしばし立ち尽くしていました。
人間として、そして芸術家として、優しい、誠実に生きた作者の生の一断面に触れた気がします。
神奈川県藤沢市　加藤冬樹

10/1 (sun) 晴
山梨県から観に来られて幸せです
生きる力をありがとうございます
河口湖　よしえ